

町人権教育研修会（9月26日）より

ハンセン病問題を通して、人権を考える



昨年度の研修会で、私たちは身近にある「差別・いじめにつながるもの」について考えました。

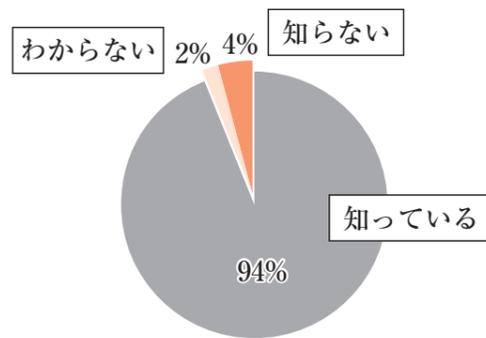
今年度は、77名の皆さんが参加され、ハンセン病問題の視点から人権を考えてみました。研修会前半では、ハンセン病問題の背景や国の隔離政策について正しい知識を学びました。その後、平成14年に鳥取市の福安かずこさんによって自費出版され、平成22年天台宗によって再版された絵本『時の響きて』の読み聞かせを通して、筆舌に尽くし難い悲劇の中で、生き抜いた元患者の方たちの生活の様子やハンセン病に一生を捧げた神谷美恵子の生き方を学びました。

研修会後半では、小グループに分かれて意見交換する中で、人間の気高さに思いを繋げ、ハンセン病問題のほかにも、正しい知識を持たないために深刻な人権問題を生じてしまいがちな私自身を見つめてみました。

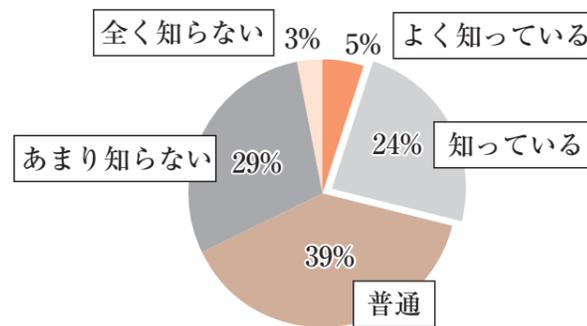
参会者一人ひとりが、自分の思いを語り合う中で、有意義な一時を過ごせたように思われます。

【事前アンケート結果から】

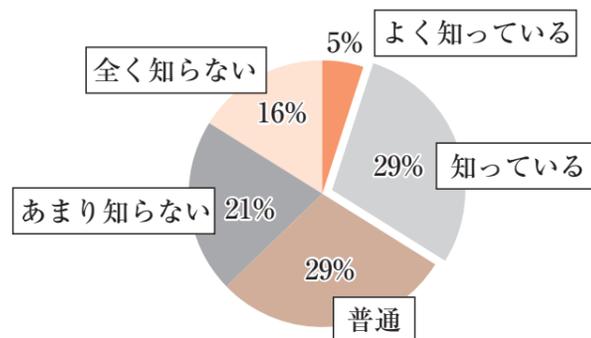
(1) ハンセン病という言葉



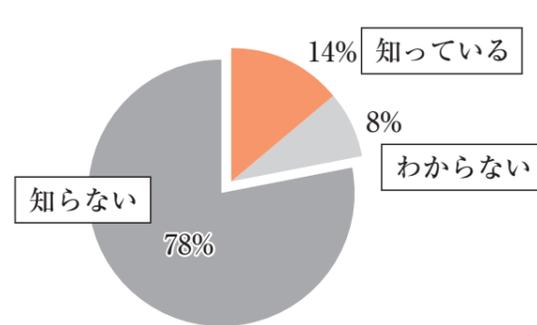
(2) どんな病気か



(3) 国の行った政策を



(4) 神谷美恵子という人を



参会者の感想

- ・舌読というものを初めて知りました。体の不自由な方が、舌を使って本を読む姿を拝見し、人の学ぶ姿の美しさを感じることができました。
- ・舌読という認知はありましたが、写真を見るのは初めてであり、インパクトがありました。人間の中に宿る崇高性とみにくさ、美しさと汚れ、人間としてどうあるべきか、考えさせられました。
- ・舌読は想像を超えることだと思いました。舌の感覚で字を読むなんて、そうならなければできないことだと思います。読み聞かせ『時の響きて』、とても心に沁みました。
- ・『時の響きて』の朗読で初めてハンセン病の事実を知りました。
- ・神谷美恵子さんの話の中で、心の中に強く残った一文がありました。「自己の身をけずらないですむような愛は、愛という名に値しない」自分のことばかりを考えている自分自身を振り返り、これからの生活の中で大切にしていきたい一文です。
- ・分散会はそれぞれの立場から人権を考えるいい場でした。違った角度からの意見を聞いて明日からの自分にどう生かしていけばよいのか改めて考えました。相手をまず知ろうとする気持ち、理解しようとする気持ち、認める気持ちを日々持ちながら人と対応して、関わっていききたいと思いました。
- ・分散会は、非常に中身の濃い会であった。いろいろな立場の方が真剣に現状を交えて話され、ものすごく良い話し合いだったかと思いました。少し時間が短く感じました。
- ・分散会は少人数で話しやすかったです。



塩澤秀彦指導主事のまとめ

「私たちは幸せです。帰られたら、そう皆さんにお伝えください。」H24年にハンセン病療養所多摩全生園へ訪問し、入所者の皆さんとの懇談会の最後に聞いた言葉です。国策で強制的に収容隔離されたのに、なぜ「幸せです」と言えるのでしょうか。療養所には生活に必要なあらゆる物が整備されているから？高齡のため介護が必要な方も多くなっていますが、そのための配慮もちゃんとされているから？私たちはこの言葉をどう受け止めたらいいのでしょうか？

研修会のテーマは「ハンセン病問題」でしたが、分散会では様々な人権課題が話されていました。年齢も立場も異なる方がハンセン病について学び、それぞれ自分の事として語る会になっていること。話の中に「地域としてどうすればよいか」という視点があること。町として取り組んできた成果だと思います。正しい事実を知り、判断をすること。人とつながり弱い立場の方に寄り添うこと。自分にできることから始めましょう。